

芥川龍之介「酒虫」における治療と病の寓意

——「聊齋志異」の「酒蟲」との比較をとおして

孔 月（中国大連理工大学講師）

一、はじめに

「酒虫」⁽¹⁾は一九一六年六月、第四次「新思潮」第四号に発表された芥川の初期作品である。「新思潮」同号の「校正後に」において、「材料を聊齋志異からとつた。原の話と殆ど変つた所はない」と自らその典拠について言及している。そのことから、発表当時のこの作品に関する同時代評は、ほとんどそれを「鼻」や「芋粥」と同じ系列の作品として位置づけ、「単なるアレゴリーとしか受取れない」⁽²⁾としていた。

現在においても「酒虫」に注目する研究は少なく、主に次の四つの傾向にわけられる。その一つは、芥川の「酒虫」と典拠の「聊齋志異」の「酒蟲」⁽³⁾との純粋な比較研究⁽⁴⁾、二つ目は、「一種伝記的な話に、注釈をつけた類」⁽⁵⁾、「殆ど原文の拡大訳」⁽⁶⁾といった評にうかがわれるように、「芸術至上主義者」としての芥川の手なぐさみの作品として位置づけようとする見解、三つ目は、原典の「酒蟲」にはない第三の答えから、「独自性を失わないように」という暗喩⁽⁷⁾、「自己を喪失した人間の悲劇」⁽⁸⁾などに芥川の警告が秘められているとの指摘である。四つ目は、芥川自身の人生観や芸術、恋愛至上主義など、自伝的要素に関連づけようとする論である。いずれも、作品に密着した見解というよりも、芥川の作品の研究傾向のなかでおおまかに捉えた見解といえよう。

この作品は、確かに物語内部の文脈だけでも十分解釈できる完結的構造をもっている。ただし、このような読みには、物語の外部との関連、つまり作家芥川の同時代史においたときによつてどのように読みとれるか、という視点が欠落している。先行研究においては「芸術」と「恋愛」という作家自身の伝記的要素が扱われたにすぎなかった。

そこで、本稿は、芥川の古典物にみられるへ閉じられた一時間空間が、「酒虫」というテクストにおいていかに同時代

文脈に（開かれる）のかを検証し、何のために、芥川はテキストを（開こう）としたのかを追究する。

二、芥川の「酒虫」と典拠の「酒蟲」

芥川の「酒虫」とその典拠「酒蟲」との比較検証は、既に稲垣達郎が試みている。そのほかにも広瀬朝光¹⁹や単援朝による比較研究がみられ、「酒虫」が取材源をいっそう拡大、改変、付加したことが基本的にあきらかになった。

これらの先行研究を踏まえながら、本稿の問題追究にとって必要とされる、芥川「酒虫」と典拠「酒蟲」⁽¹⁰⁾の違いを簡単に再整理してみる。（「表一」）

【表一】芥川龍之介「酒虫」と典拠の「酒蟲」（『聊齋志異』）の比較

芥川の「酒虫」	「聊齋志異」の「酒蟲」
劉、蛮僧、儒者、童僕、丫鬟	劉氏、番僧
蛮僧の来歴 Ⅱ 西域、宝幢寺	蛮僧の来歴なし
帰結文が先	時間的順序
風景描写	風景描写なし
人物の心理描写	人物の心理描写なし
治療過程の具体的描写	治療過程の描写なし
酒虫の用途については蛮僧しか分らない	いくらでも美酒を造れる酒の精
健康、家産の零落、手に鋤を執る	健康、家産の衰え
三つの答	一つの答

芥川「酒虫」の内容は、芥川自身も述べているように、典拠「酒蟲」とほとんど変わらないが、典拠にはない作為が大

幅に盛り込まれ、素材に対していくつかの取捨選択が行われている。典拠にはストーリー展開以外の描写表現は一切ないが、芥川の「酒虫」はストーリー展開をはじめ、語りの形式にふさわしい対話文、人物の増設、人物の外貌、心理、風景の描写などがみられる。第二には、蛮僧（典拠では番僧）を焦点化する語りが多くなっている。その中心が酒虫との関係であり、典拠では酒虫の不思議さが強調されているが、芥川作品では酒虫を扱う蛮僧の不思議に焦点が移行している。第三には、語り納めにある作者の答えが、典拠では一つなのに対し、芥川作品では三つに増えている。これらの差異が何を意味するのが注目される。とりわけ芥川による蛮僧の描写、酒虫が病と健康、さらに家産と結びついていることの意味、そしてその結びつきを解釈する答えがなぜ三つに増えたのかを手がかりに論を進めていくことにする。

三、〈病〉の寓意——大正五年前後のメディア言説をとおして

芥川「酒虫」は、一言でいえば、蛮僧が主人公劉の「病」を治療するという簡単なストーリーである。蛮僧が劉の大酒飲を「病」とみなしていることについては、基本的に典拠「酒虫」を踏襲しているが、その人物像が、芥川によって具体的な設定をされているところにまず注目する必要がある。「象貌の奇古な沙門」、「皮膚の色が並はづれて黒い」、「葱嶺の西」（一九一頁）からきた異郷のマレピト（＝客人）という設定によつて、実は蛮僧がこのテキストの時空間、すなわち劉の属する共同体にとつては〈他者〉であることが示されている。〈他者〉とは、〈外部〉あるいは〈周縁〉から、このテキストが作り出している時空間に入り込んできた〈マレピト〉¹¹⁾にあたる。物語の伝統では、そのような人物は異人＝超人であつて、小説が呈示している時空間に属する人間にとつては、およびもつかない能力をもつ霊的存在とみなされる。芥川は、その異人の不可思議性を巧みに利用している。

蛮僧は「医療」と「房術」で不可思議な治療を施し、「黒内障」「病闌」などの治療でも評判をとつた人物として設定されている。「黒内障」は喫煙、肥満、カフェインの多量摂取による眼病¹²⁾である。また「病闌」は、日本語にはない言葉であり、「二十五史」や「聊齋志異」など中国古典にわずかにみられる¹³⁾。それによると、「病闌」とは、生殖能力に関わる病氣という意味で使われている。これら遺伝的、先天的な病氣まで治療できる蛮僧は、超人的な能力をもち、

蛮僧は、劉やその共同体にとって「異人」ともいえる存在であることがわかる。そして、それとともに、蛮僧の治療する「病」には、典拠の大酒飲みによる酒害だけではなく、この二つの不治の「病」が加わっていることに注意する必要がある。とりわけ、「病闈」が生殖能力に関わるという点と酒害と組み合わせられた点に、この「閉じられた」テクストが「外部」に「開か」れた可能性がある。

本稿の方向性に沿っていえば、このような設定は、「政治に、教育に、学問に、宗教に、実業に、其他百般の事」として改良進歩を要¹⁴⁾する、明治末期から大正前半にかけての時期において、国家発展に弊害を与える行為（飲酒過度、喫煙、生殖病など）の「病」に対して、国家による教化と教育、つまり「治療」が推進される状況に照応していると考えられる。「酒虫」は、その「病」と教育（教化）に向かつて、テクストを「開こう」と意図していた、とみるのが本稿の立場である。

このような見通しから、蛮僧の治療のアレゴリーをとらえる前に、テクスト内における「病」とされた劉の過度の飲酒、および「黒内障」「病闈」の語彙からみられる喫煙や性病問題は、「酒虫」が執筆された時代前後の社会的言説と照応させてみたとき、どのようにとらえられるかをみていきたい。

まず、一九一〇年代の「飲酒過度」に関する言説であるが、次の資料群がみられる。

①飲酒過度の風は、不撰生不規律の一現象にして、（中略）実際に於ては教育上、風俗上、経済上、將た健康上、遺伝上、種々の甚しき悪結果を呈するものなるが故に、嚴に之を取り締り、殊に学校教育に於て、知識及び道德上より、之に関する克己自制の必要を知らしむるを要す¹⁵⁾。

②社会政策的方法の一は、飲酒毒等の如き、心身欠陥者を生じ易き原因を除去する事なり。（中略）酒癖者、怠惰者、色情狂、常習犯罪者等に対しては、其の結婚に制限を加へ、（中略）癩痢病者、生殖器病者、結核病者に対しても、亦医学上適當なる結婚制限を加ふるが如き方法を採用することは是れなり。更に進んでは、不良児童化院、精神病院の如き組織を拡張し、右に挙げたるが如き病者の甚しき者を隔離するも亦必要なるべし¹⁶⁾。

③青年に飲酒の許すべからざる理由は（一）衛生上（二）風紀上（三）経済上の三点に存す。（改行）衛生の上よ

り見れば酒は腸胃を害し、又神経系統を傷ふ。種族の衛生の上より論ずれば酒は之を飲用せる人の子孫を害す、(中略) 延いては社会の秩序を紊り、和楽を敗り、其他種々の罪悪を犯すに至れる(中略) 飲酒の悪弊は経済上又多大の損失ある言を俟たず。⁽¹⁷⁾

④一家の経済は、一家内の道德と密接の關係を有つて居るのである。(中略) 主人が青楼に通ひ酒を飲み女を弄んで(中略) 遂には湯水のやうに金錢を遣ひ散らすと云ふやうになつてくる。そうすると一家の経済は乱脈となるばかりではない、甚しきに至つては一家を廃滅するやうになるのである。⁽¹⁸⁾

資料①によると、(飲酒過度)は、国民の不摂生・不規律を端的に示す現象として、各方面に悪影響を与えるとされ、学校教育によつて克服すべきであるという。また、資料②からは、医学上「飲酒毒」は「心身欠陥者」を生じ易いため、医学上においても、「酒癖者」「怠惰者」「生殖器病者」などは、社会的な「病者」とみなされたことがうかがい知れる。資料③と④も、(飲酒過度)が健康のみならず、経済上においても害毒であると説く例である。これ以外にもいくつかの言説をあげることができる⁽¹⁹⁾が、衛生、人種(日本人)、経済、政治への影響から、(飲酒過度) (喫煙) (生殖病者)などを(病人)扱いするものが大部分である。

一九一六年前後の日本では(飲酒過度)が社会的な(病)とされていたことが確認できたとする。したがつて、その治療法ともいべき禁酒も、この時期の社会的課題であつたことが当時の新聞メディアにおいてみられる。つぎに『読売新聞』を中心にいくつかの例をあげる。

⑤日本人壹ヶ年間に喫む煙草の金額戦闘艦五艘出来る(中略) 煙草の害毒に到ては一層甚し諸君は此等に鑑みる処あれば断然禁煙し寧ろカオルを口中せられよカオルは衛生上経済上最も必要な香錠である。⁽²⁰⁾

⑥禁酒運動が日に月に盛んに成つて来る(中略) 歐洲あたりでは酒類売捌所を減少したり、税金を加重したり、(中略) 常習的酔狂者は監獄に送る規則を定めてある程である。(中略) 瑞典及び挪威では、其監獄へ送られた酔客に

斯う云ふ風に酒嫌ひになる方法を施して居る。(中略) 我国では麴麴の代りに飯を用ひればそれでよい、之に苦しんで居る者は宜しく試みる可しである。⁽²¹⁾

⑦△「日本の禁酒運動」 禁酒運動と基督教とは、密接の關係ある如くなつて居るが、佛教徒中にも、現に熱心なる禁酒論者の少なくないことを、我等は知つて居る。宗派自身の此の問題に対する態度は別とし、社会的運動としては、全然宗教的色彩のないものが、少くも日本の現在の状態に於ては、最も機宜を得た仕方ではあるまいか。⁽²²⁾

⑧△「意志の力に須つ」 歐洲に於て衛生思想の最も發達して居るのは、瑞典挪威である。(中略) 人口の九分の一は既に禁酒して居り、(中略) 酒類は一切政府で醸造して之を販売し、その利益は禁酒運動等の社会事業に投ずる事になつて居る。これを見ても法令で禁酒するよりも衛生思想が發達して、人が酒害を知り、(中略) 幼児から益に親しませぬ様にすれば根本的に禁酒国を作り上げる事が出来ると信ずる。⁽²³⁾

資料⑤の「カオール」という口中清涼剤の広告に注目すると、その宣伝文句からも煙草や酒等の日常生活における嗜好品は、もはや個人の健康問題であることを越えて、それらの害毒が社会あるいは国家の市民、国民レベルの問題として、当時の政治・経済・公衆衛生との關係のなかで宣伝されていたことがみてとれる。いわば、煙草や酒の害毒は、国家の健全な發達を阻害する元凶として位置づけられつつあったのである。資料⑥からは、大正五年前後に禁酒運動が盛んに奨励されていたことがわかる。

禁酒・禁煙は、西欧列強との国力の差異を生む元凶となると認識されるようになると、当然のことながら、西欧の禁酒禁煙運動に関心がもたれるようになる。資料⑦では、「佛教徒中にも、現に熱心なる禁酒論者の少なくない」ということが注目される。つまり、当時において仏教徒の禁酒論者が多いこと、この情勢はキリスト教を含めて、宗教界全体が禁酒に関わっていることに気づかされるとともに、宗教界の国家的・社会的役割が注目されるようになったことをうかがわせる。それに対して、資料⑧では、法令より意志の力で禁酒を励行する勤勉国を作り上げる事が大事だという言葉である。

このように、一九一五年前後の「飲酒過度」に警告を発する言説、とりわけ「読売新聞」を中心に酒、煙草の害を主張する禁酒言説をみてきた。とはいえ、「酒虫」において、作者芥川は、けつして禁酒自体を問題にしたのではないと考える。酒を「黒内障」、「病關」と並列することで、飲酒が「病」ととらえられていることをあきらかにしている。作者は個人の嗜好と快樂が、国家の政治、経済、それに国民の公衆衛生などに損害を与えるもの、つまり個人の享樂主義が国家の發展（国力の強大化）を阻害する「病」としてみられた傾向のあることを呈示している。こうした背景をもってテクストにおける「治療」の寓意をどのように読むかを追究していきたい。

四、〈治療〉の寓意——物語の〈内部〉と〈外部〉の照応をとおして

蜜僧の治療過程については、典拠には一切描かれていないに對して、芥川の「酒虫」は多くの叙述量をついやしている。蜜僧の治療は、劉が予想した「薬」を用いるものではなく、また「針」や「呪」を使うものでもなかった。それは「唯、裸になつて、日向にちつとしてゐさへすればよい」という、簡単に「不思議」な方法であった。その治療方法を詳しくみると、「身動きをしてはいけない」、体を「細引でぐるぐる巻」にし、「酒を入れた素焼瓶を劉の枕もと」へおくと、この方法により、劉が喉の渴きや酒香に耐える姿が描かれるわけであるが、この方法は、実は、劉の「我慢」「忍耐」の精神を鍛えさせようとするものと読みとれる。

蜜僧の治療の効果は意外な方向へと向かう。体内から「酒虫」をとられた後の劉は、健康衰弱→家産の傾斜→自ら働くという一連の変化を遂げる。これは「酒虫」をとられた後の出来事であるから、その間には因果関係がある。蜜僧にとつて「酒虫」は劉の「病」であったが、劉にとつてその「病」は、身体的には慣れた習慣的なものであり、それを「病」と思ったこともなかった。しかし、蜜僧の治療で「酒虫」が駆逐されることによつて、劉は劉にとつて本當の病を患うことになつたのである。貧乏になり、さらに自ら働かなければならなくなつたという事態が、劉にとつての「病」なのだろう。

典拠と比べると、芥川の「酒虫」には、「手に鉄を執」という設定が新しく加えられている。「朝から、殆、盃を

離したと云ふ事がない」富豪であり、道楽者であつた劉から、一変「手に鋤を執」ることになつたといふことは、自分の力で生活を立てなければならなくなつたことを意味する。したがつて、蜜僧の治療の最終目的は、劉の自力独行の能力を養わせ、勤勞に意欲的な人間に変えさせるための治療であつたことが示唆されている。これは、典拠との著しい差異の一つであり、このテクストに新しい内容を付与したものとすることができる。典拠では、蜜僧の「治療」目的について、「劉驚謝、酬以金、不受、但乞其蟲。問——「将何用？」曰——此酒之精、甕中貯水、入蟲攪之、即成佳釀。」¹²⁴⁾と述べられている。すなわち、番僧は、治療代の代わりに酒の精として美酒をつくる酒蟲がほしいと願う。典拠において、酒蟲は、いくらでも美酒が造れる「酒の精」として、富あるいは宝の象徴であつたのである。それに対して、芥川の「酒虫」は、「酒虫と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中になくなると、どうなるのだか、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだか、それを知つてゐるのは、蜜僧の外に一人もない」といふ謎としてしかいわれていない。これはあきらかに、作者が典拠の意味を捨象したもので、蜜僧の「治療」の目的を、劉の忍耐能力と勤勉能力を付与するためだつたとする意図的改変であつたといえる。

「酒虫」が発表された二ヶ月後、芥川はまた、「新思潮」(一九一六年八月号)の「校正後に」で、「酒虫」は「しゆちう」で「さかむし」ではない。氣になるから、書き加へる。(芥川)と特筆している。これは作者がわざわざ「さかむし」ではないとこだわつてゐるようにもとれる。「さかむし」は、「逆虫」とも書ける語で「回虫などが肛門から出ないで口から出るもの」¹²⁵⁾という意味合いもある。芥川はわざと「さかむし」ではないと読み方にこだわるようにみせかけて、実は「逆虫」(回虫)という意味としても読める語の二義性を与えている可能性がある。そうすることによつて、吐き出した虫がどのような形象のものか読者は容易につかめるようになる。こうとらえると、「蚯蚓」のように、「蠕動」し、「むづりむづり」と「食道を上へせり上つて」くる物がどういふものか、という疑問も容易に解決できるようにになる。劉の口から出たものは、まさに「さかむし」(逆虫)ではないかと思わせるほどの描写が行われている。それはテクストへ内部へにおいて、口から吐き出したのが「酒虫」とすれば、テクストへ外部へでは、「逆虫」(「回虫」)であつたと読めるのである。また、「さかむし」の「回虫」は、動物(豚など)や人間の体内に附着する「寄生虫」で、怠けて働かない人間をも指している。その意味で、「豚のやうに肥」り、朝から盃を離したことの無い劉は、「怠惰」そのものの人間、換言すれば、「寄生虫」のような生活を送る人間である。劉の「病」とされる「酒虫」は「さかむし」

の喩えであり、劉の体内には「寄生虫」が巣くっていたとも読みとれる。まさに蛮僧は、劉の「寄生」、すなわち、「怠惰」をへ病とし、それをへ治療し、「働きある」人間に改造したといえる。

蛮僧の治療を疑いなく受け入れ、「酒虫」を吐き出した劉の行為は語り手によって次のように語られている。

何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂濶なやうに思はれるが、普通の人間が、学校の教育などをうけるのも、実は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。(一九七頁)

ここで、テキストが一転、批判の矛先を当時の日本の学校教育に向けていく。つまり、テキスト内にへ閉じられてゐる非日常的な世界を、日常世界の同時代コンテキストに向けてへ開いていこうとする意図がうかがえる。そこで、二つの行為の「迂濶」さ、何もしらず蛮僧の治療を受けたことと、「普通の人間が学校教育を受ける」こととは、何を指しているのかを説明すれば、作者がなぜ一九一六年にこのテキストを執筆したのかもあきらかにならう。

以下、テキストが指す「学校教育」が、具体的に何を指しているのかを、テキストのへ外部へコンテキストから考察し、蛮僧の治療が学校教育とどのように関わるのかをみていきたい。

五、〈蛮僧〉と学校教育

「酒虫」における蛮僧と学校教育の関係は、当時における僧侶と学校教育の関係性を想起させる。吉田久一⁽²⁶⁾によれば、僧侶や地方の小学校教員は、日露戦争以降の国家が精力的に展開した風紀・思想問題あるいは国民教化の、全国各地における担い手として期待されていたという。この事態は「酒虫」が書かれた時期においても存続しており、次の資料から確認できる。

市町村長及学校長は学校を中心に、市町村教育会又は報徳会の如きものを組織し、其市町村民の智能啓発及び徳性

涵養を期せざるべからず。(中略)而して集会すべき人物は常に公私立学校長・教員・市町村長・助役・学務委員・市町村社会議員・警察署員・新聞社員・各官衙職員・神職・僧侶・軍人及市町村民の推服せる長者等一同の協力一致に基く社会的熱心に仍りて、一般市町村民を誘掖提擲する方法を最適切に講究せんことを要す。²⁷⁾

「酒虫」の執筆時期である一九一六年前後には、風紀・思想・国民教化を背景として、宗教と教育に関する議論が大きくなっていった。『読売新聞』(一九一三年十一月十七日)に掲載された井上哲次郎の「宗教と教育の関係」、中村枯林「教育と宗教との問題に就て」(一九一四年一月二七日)、潜淵「教育亡国論」(一九一四年一月三日)、「家風と校風」(一九一五年四月一〇日)など、学校教育に宗教を加味すべきかどうかなどの論議の記事がみられる。そのなかには、学校教育に宗教的情操を入れることに反対する言論もあるのだが、宗教と教育の連携を唱える言説が大多数を占めている。

大正初期になると、社会のみならず国家に貢献する人材育成には、宗教と学校の調和が期待され、必要とされた。もはや教育の目的は、個人・国民の情操ではなく、国家を構成する国民の情操教育の方向に向かっていたのであって、国民国家のための国民育成という方向から、大きく国力発展に資する国民教化に向かいつつあったのである。国民は国家のためにあるという、国家のために奉仕する国民の育成が、国策となるようになった。その国策を実践するうえで、教師だけではなく僧侶も動員された。教師(Ⅱ学校教育)と僧侶の結びつきこそ、個人としての人間ではなく、国家に奉仕する人間、言い換えれば国民国家の国民育成を意味するようになった。

では、学校ではどのような教育が行われたのかを国定教科書に探ってみたい。「酒虫」の執筆期の一九一六年は、第二期国定教科書(一九一〇年・一七年)が使用された時期に当たると。国定教科書全般を通し、最も多くとりあげられているのは、明治天皇を除くと、二宮金次郎であったが、中でも大きくとり上げられていたのが第二期であった。第二期には、二宮金次郎の「仕事にはげめ」、すなわち儉約につとめよという「勤儉」の精神が教え込まれたことが確認できる。²⁸⁾それだけでなく、国定教科書全般をみても、「仕事にはげめ」が主な徳目として教育政策に応用され、道徳教育を支配したことがわかる。明治末期から大正初期にかけて、「忠君愛国の思想を益々強盛ならしめると共に国を富ましむるやうな働きある国民」²⁹⁾の育成が急務であった。「酒虫」の執筆された一九一六年も、時期的にこのような国民像が求めら

れていたことが推測できる。

このような国家に奉仕する「働きある」勤儉な人間像の育成は、「時に政治的必要から、また時には一般庶民が生きる必要から説かれてきた」が、「明治末の場合には、『戊申詔書』の渙発によって誘発」⁽³⁰⁾されたともいえる。「詔書」は、単に庶民の生活防衛上から生じたものというより、「国家的要請」⁽³¹⁾として説かれたものである。詔書は「忠誠な臣民」、すなわち天皇制国家に奉仕する人間を育成するため、奢侈生活を抑制し、勤儉力行して国富増強にあたることを、国民道德の最も重要な徳目とした。このような国民教育においては、個人の自由とか独創は抑圧され、ひたすら没個性的な人間になることが求められた。芥川のさきほどの言葉「普通の人間が学校教育などをうける」ことが「甚、迂闊」という皮肉の意味するところを、この国策の方向と重ね合わせるとき、そこに個人の創意・個性の發揮ではなく、ステレオタイプの没個性的な人間教育への諷刺を読みとることができる。

こうして国家に奉仕する人間、つまり天皇制へ「忠誠」な人間が求められるようになる、その趣旨を具体化するために行われたのが国民道德論の創出と地方改良運動であった。⁽³²⁾そこには、僧侶や学校の教師などが主な担い手とされ、学校は国家奉仕の地方機関と成り下がり、宗教施設のもつイデオロギーとともに、日本人を「忠誠な臣民」へと作る装置として機能していたことが、以上みてきたことからわかる。

このように、「酒虫」にみられる蛮僧の「治療」——勤勉、忍耐の精神、働く人間に鍛え直していく「治療」は、テクスト外部において、国家が国民に課した「教化」「教育」と重なりあっていたのである。

六、三つの答えのトリック性

「酒虫」の末尾で、酒虫を吐き出して以来、劉の健康が衰弱し家産が零落したことをめぐり、人々が口にした意見のなかで最も代表的な三つの答えが、語り手によって挙げられている。この三つの答えのなかに、このテクストのトリックが隠されている。

三つの答えのうち、第一の答えである「酒虫は劉の福であつて、劉の病ではない。偶、暗愚の蛮僧に遭つた為に、好んで、

この天与の福を失ふやうな事になつたのである。」は、『聊齋志異』の「異史氏曰」からとつたものである。すなわち、「蟲是劉之福、非劉之病、僧愚之以成其術。然歟、否歟？」³⁾を汲んだものといえる。

蒲松齡の「酒蟲」では、劉が健康を損ない貧しくなる原因として、「異史氏曰」という他者のまなざしをおして示している。それに対して、大塚繁樹は「運命觀的教訓的」であると指摘している。確かに、最後の一語「然歟否歟」がなければ、そのように解釈できるかもしれない。しかし、そのような見解に対して作者が「然歟否歟」という反問をすることによつて、むしろ「異史氏」の「運命觀的教訓的」な生觀に対して疑問を抱き、否定的であると読みとれる。芥川の「酒蟲」の末尾では、三つの答えに対して選択を回避しているが、これも典拠の「然歟、否歟」に通じるところである。

ただし、典拠と芥川作品の差異について触れておけば、典拠ではこの一つの答えを提示しながらも、それに「然歟、否歟」という反問の形で終わらせていた。つまり、作者は別の見方があるものの、それを出さずにしたということになる。それに対して、芥川の「酒蟲」では、あえて三つの答えを用意して多様な見解を示しながらも、結局は自身の判断を保留する。そこには別の意図がうかがえるのだが、これについては後述する。

第二の答えの「酒蟲は、劉の病であつて、劉の福ではない。(中略)もし酒蟲を除かなかつたら、劉は必久しからずして、死んだのに相違ない。」は、典拠「酒蟲」の評者である但明倫の評によるものとされる。すなわち、「嘗見有酒力初不甚佳、而嗜飲無度、其繼也、日飲石余、而不見其醉。(中略)其人亦不久而死矣。可知劉之蟲、其病也、非福也。」を継承した痕跡がみられる。しかし、第二の答えには、劉の「一飲一甕を尽す」行為が「常人」として考えられないと語られている。つまり、劉を「常人」ではないと考える者による答えとして挙げられている。それを第一の答えと比較すると、第一の答えには、明治以前の「近代的人」ではないと知による考え方が挙げられているとすれば、第二の答えには「病人／常人」という枠で、このテクストを解釈する人の考え方が挙げられているといえよう。

本稿の論旨にそつて言えば、明治国家の国家的目標を達成するために、個人の反社会的な逸脱行為の嗜好を「病」と規定し、「病人／常人」とはつきり区別する近代国家のイデオロギー装置の発動を意識していることがみてとれる。その背後には、そのようなイデオロギーへの嫌悪がうかがわれ、学校と教育のあり方に対する反発が読みとれる。作者の芥川は、第一、第二の答えに代表される「考え方」にはけつして同調していない。

第一と第二の答えはどれも、「病」か「福」かという二項対立の枠のなかで物事を判断する考え方として挙げられて

いる。それに対して、第三の答えは「酒虫は、劉の病でもなければ、劉の福でもない」と第一と第二の答えの「病」と「福」の枠を崩している。第三の答えは典拠にはみられないものである以上、それは芥川による独創であり、彼が一番主張しようとした部分であることに間違いない。第三の答えのみが芥川の独創であり、「劉の一生から酒を除けば、後には、何も残らない」、「劉が酒虫を去つたのは自ら己を殺したのも同然」であるところから、「自己」をなくすと、「自己」は「自己」でなくならないというのが、芥川が求める生き方であり、「酒虫」において主張しようとした主題だったというのである。とはいえず、作者が劉を「虚栄心」に満ちた人、人の話に盲従的な人物として設定していることからわかるように、けっして劉に同情し、被害者とみなしているわけではない。「劉が酒虫を去つたのは自ら己を殺したのも同然」という語りには、劉自ら「自己」をなくしてしまったことへの批判意識がみられる。典拠のない第三の答えには、一九一五年前後の日本に波及してきた大正デモクラシーの自由主義思潮の影響下で唱えられた個人尊重思想の影響がみられる。もし芥川がこのような思想を背景に据えたとしたなら、第三の答えこそが、彼自身の主張であると推測できる。

以上のようにみえてくると、「酒虫」は同じ初期の作品である「鼻」や「芋粥」と同じく「自我喪失」という問題意識をもっていることはあきらかである。これについて単援朝が詳細な論を展開している。

しかし、作品の最後に語り手はあえてどの答えが正しいのかを選択せず、選択を読者に委ねている。ここには、作者芥川の二つの隠された戦略がある。第一の戦略は、自分が論じようとしているテーマである「個人尊重」という命題の方へと誘おうとする仕掛けである。答えを選択せず読者に委ねることによって、読者を自分の立場に引き込もうとする仕掛けは、作者の手を離れたテキストによる自らの位置づけの表明とも受けとることができる。つまり、自分は第三の考え方をもっているが、けっしてそれをすべての読者に強要しようとしないうことである。第二の戦略は、テキストそのものの自己検閲である。第三の答えを正解と判定しないこのテキストは、イデオロギー上の非難、つまり第一と第二の答え、とくに第二の答えを否定してしまうことを避けたもので、そうすることは検閲の危険を招くだろうと予想していたからである。「作家の扱ふ材料を或る狭い範囲に限ることを余儀なくさせ」るのは「日本の図書検閲制度」であり、若い作家たちが、「既に書き古され」た材料から、「独自の解釈と技巧とを齎らさうとするに到つたことは、むしろ当然すぎる程当然」である⁽³⁴⁾と、田中純による同時代の発言からも、当時の図書検閲制度の厳しさの一端が示されていると同時に、新進作家である芥川が置かれた時代状況をもうかがわせている。

これまで考察してきたような、時代の政治的・社会的コンテキストとの関わり合いのなかで読めば、第二の戦略は国家の統一的な教育体制への批判意識が込められていることを隠蔽するための手法といえる。それだけでなく、テキストはあえて答えを出さずに読者に考えさせることによって、読者の主体性を刺激し、近代の主体のありようを決定づけている。作者が主張しようとするのが第三の答えであり、時代の推移による新旧関係から三つの答えは縦列関係にみえるが、三つの答えに対する判断保留のところに、三つの答えは並列関係ともなると考えられる。

七、おわりに

芥川の初期小説、いわゆる「昔」を題材とした作品には、共通に日本の自然主義文学との関連性が問われる。松本常彦は、芥川が日本の自然主義文学と同じ問題群、人間の「欲望」「幻滅」「エゴイズム」などを共有しつつ、「対抗的」であると指摘⁽³⁵⁾している。この指摘はまさに当を得たもので、本稿でもこの点について異論を挟むつもりはない。ただし、「対抗的」であったのは、松本常彦の指摘する「趣味や物の見方」あるいは「曲折」という表現方法（虚構と赤裸々な告白）のみに限られたものではない。自然主義文学が「個人性」しか求めないところに、芥川は反感を覚えたともいえる。言い換えれば、社会性の乏しいところへの反感であり、それに対して「対抗的」であるといえよう。

「酒虫」は、伝統社会で一般的であった欲求解放の回路を断ちきって、家と個人を結合する一つの単位、すなわち自己抑制的・自己規律的な生活の確立へと人々の生活を二元化し、人間を一つの類型にはめようとする国家イデオロギーを批判し、その装置である〈学校〉と〈宗教〉の同質性、すなわち、双方とも国家と社会および個人の関係において、人間を呪縛し拘束するものであることを看破し、諷刺を込めて実現したテキストということになる。このような芥川の創作姿勢は、執筆当時抱いていた自然主義文学への不満、すなわち社会性の欠如への問題意識とけっして無縁ではなかったと考えられる。「酒虫」は、自然主義文学へのメッセージであると同時に、自身が生きる日本社会への鋭い洞察をおして、「酒虫」に社会性を込めて示したテキストといえる。

- (1) 本文が用いるテキストは『芥川龍之介全集 第一巻』（岩波書店、一九九五年）による。
- (2) 『芥川君の作品（下）』『朝日新聞』一九一七年七月一日『芥川龍之介研究資料集成 第一巻』日本図書センター、一九九四年九月、七一頁。
- (3) 『聊齋志異』の巻一四の「酒虫」であるが、本稿では芥川の「酒虫」と区別するため「酒蟲」と表記する。
- (4) 広瀬朝光「芥川『酒虫』の文芸性」『愛知大学国文学』第一六巻、一九七六年三月。
- (5) 稲垣達郎「歴史小説家としての芥川龍之介」『芥川龍之介研究』河出書房、一九四二年、一六一頁。
- (6) 吉田精一「芥川龍之介」三省堂、一九四二年。
- (7) 菊池弘「芥川龍之介の歴史小説」『芥川龍之介 表現と存在』明治書院、一九九四年、一八七頁。
- (8) 単援朝「芥川龍之介へ変者」の系譜」『熊本工業大学研究報告』第二四巻第一号、一九九九年三月、四一頁。
- (9) 広瀬朝光、前掲書、一〇頁。
- (10) 芥川が読んだのは『詳注聊齋志異凶詠』とされているが、そこには芥川の「酒虫」の第二の答えの依拠となった但明倫の評はない。よって、芥川は但明倫の評も加えてある版本を読んだとみられる。ここでの引用は任篤行輯校の『聊齋志異 全校会注集評』（齊魯書社、二〇〇〇年）による。
- (11) 赤坂憲雄「異人論序説」筑摩書房、一九九二年、一〇二頁。
- (12) 芥川がどのようにこのような医学知識を得たかは同時代資料では調べた限りみつからないが、「首が落ちた話」（『新潮』一九一八年一月）を創作する際、典拠「諸城某甲」（『聊齋志異』巻三）の語句の意味について、石田幹之助に書簡（一九一六年五月二日）で尋ねたことから、「黒内障」に関しても知人に聞くか調べた可能性は十分あると考えられる。
- (13) 歐陽修『二十五史』の「新五代史」（巻一四）「唐家人傳第二」では、「繼岌少病闌、無子。」とあり、『聊齋志異』巻二の「巧娘」では「适毛家小郎子、病闌、十八歳而不能人、因邑邑不暢、繼恨如冥。」と先天的に性的不能の意味で使われている。
- (14) 山内佐太郎『国民教育之精神』関西中学校、一九一五年、二頁。

- (15) 成瀬仁蔵『新時代の教育』博文館、一九一四年、二四四～二四五頁。
- (16) 同書、二四七～二四八頁。
- (17) 山内佐太郎、前掲書、二四八～二四九頁。
- (18) 村田宇一郎『経済と道德との關係』『学校中心自治民育要義』宝文館、一九一〇年、一三二～一三三頁。
- (19) 吉田熊次『我が国民道德と宗教との關係』(敬文館書房、一九二二年)、中島力造『我國現代に缺乏せる富の力』『道德と経済』(富田文陽堂、一九二五年)などの書物からも飲酒の害毒言説が確認できる。
- (20) カオール(広告)、『読売新聞』一九一三年五月二二日。
- (21) 『禁酒新法』、『読売新聞』一九一四年四月三日。
- (22) 『酒のため』／「婦人と酒」／「日本の禁酒運動」、『読売新聞』一九一四年六月一日。
- (23) 『禁酒と意志』、『読売新聞』一九一五年一月二二日。
- (24) 典拠の「酒蟲」の引用文は、蒲松齡『聊齋志異 全校会注集評』(任篤行輯校、濟南、齊魯書社、二〇〇〇年)による、九一六頁。
- (25) 新村出編『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年。
- (26) 吉田久一『日本の近代社会と仏教』評論社、一九七〇年。
- (27) 山内佐太郎、前掲書、二三〇～二三二頁。
- (28) 石川松太郎『図録 日本教育の源流』第一法規出版、一九八四年、一四三頁。
- (29) 村田宇一郎、前掲書、四九頁。
- (30) 小林澄兄『日本勤勞教育思想史』玉川大学出版部、一九六九年、一一頁。
- (31) 山本恒夫『近代日本都市教化史研究』黎明書房、一九七二年、一九八頁。
- (32) 土屋忠雄(ほか)編『日本教育史』学文社、一九九三年、九三頁。
- (33) 蒲松齡、前掲書、九一七頁。
- (34) 田中純『新技巧派の意義及びその人々』関口安義編『芥川龍之介研究資料集成 第一卷』日本図書センター、一九九四年九月、八頁。(初出 『新潮』一九一七年一〇月)。
- (35) 松本常彦『芥川龍之介と弱者の問題』佐藤泰正『芥川龍之介を讀む』笠間書院、二〇〇三年、一七三頁。